

□ 川崎病の疫学的研究

柳川 洋（自治医科大学公衆衛生学教室）

疫学研究班は本年度4種類のプロジェクト研究を実施した。第1のプロジェクトは「第9回川崎病全国調査」で柳川、中村班員が担当した。第2は「川崎病のサーベイランス」で、中村班員が担当した。また「流行時における川崎病患者および家族の健康調査」は麻生、今田班員が担当した。この研究は、東京女子医大第二病院、帝京大学医学部、土浦協同病院、日大医学部、日赤医療センター、金沢医科大学の6施設の協力を得て実施した。

古庄班員は16施設の共同研究として、「ガンマグロブリン療法に関する研究」を実施した。研究成果の概要は以下に示す通りである。

「第9回川崎病全国調査」は昭和60年1月～61年12月の2年間に全国100床以上の病院2,339カ所を受診した患者を対象とした調査で、昭和62年1月21日現在770施設から調査票の回収があった。今年度中に未回収施設に対する再依頼を行い、集計解析を行う。最終的には約65%の回収を見込んでいる。

「川崎病のサーベイランス」は、迅速な流行の認知を目的として、全国150施設から毎月患者数を報告してもらっている。昭和61年12月で3年間継続したことになる。

「流行時における川崎病患者および家族の健康調査」は、川崎病流行時に川崎病患者同胞および家族にどの程度健康異常が出現するかを知ることが目的としている。調査の結果川崎病患者が発病したとき同胞および両親にもなんらかの症状が出現する割合は異常に高いことが予測された。

「ガンマグロブリン療法に関する研究」では、冠状動脈障害の出現を予防することを目標にガンマグロブリン療法の評価を行った。現在のところガンマグロブリン200mg/Kg/日を5日間投与する方法が最も有効であるという結果を得ている。